

聖書：使徒 8：14～25

説教題：神の前に正しい心

日時：2013年10月6日

前回は思わぬ形で新しい展開が与えられました。ステパノのことから迫害が起こり、信者たちはチリヂリバラバラに諸地方に散らされました。エルサレム教会が始まって以来の大変な危機的状况が生じました。しかし、散らされた信者たちは、何と行く先々でみことばを宣べながら巡り歩きました。この結果、イエス様が1章8節で語っておられた宣教計画の新しい段階、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われた言葉の中の「ユダヤとサマリヤの全土に」という第2段階が導かれることとなったのです。前回は特にピリポによるサマリヤ伝道が記されました。彼の活動によって多くの人々がイエス・キリストを信じてバプテスマを受け、その町に大きな喜びが起こりました。

この知らせを受けてエルサレムにいた使徒たちがペテロとヨハネを遣わします。サマリヤの地では不思議なことが起こります。二人が行って分かったことは、サマリヤ人たちはバプテスマを受けてはいたものの、聖霊がまだ誰にも下っていないということでした。そこでペテロとヨハネが彼らに手を置いて祈りました。すると聖霊が下った、と記されています。ある人はここを読んで次のような疑問を持つでしょう。洗礼を受けることと聖霊が下ることとは別の出来事なのだろうか。そうだとすると、洗礼を受けてもまだ聖霊は受けていないという状態があり得ることになるのだろうか。またある人はこうも考えるでしょう。聖霊を受けていないのに信仰告白することは可能なのだろうか。ある人がイエスを主と告白するとしたら、それは聖霊によると他の箇所では言われていたのではなかつたらうか。そしてある立場の人たちは、この箇所に基づいて次のように主張します。すなわち、信仰告白をして洗礼を受けてもまだ十分なクリスチャンとは言えない。聖霊の体験はその後に来る。だから洗礼とは別に、聖霊が自分に下る体験を求めなければならない。そうしてこそ、より高い段階のクリスチャンになることができる、と。その人たちによればクリスチャンの中には信仰告白して洗礼を受けただけの第1段階にとどまっている人と、その後で聖霊の特別な注ぎを受けた第2段階にまで達した人という二種類のクリスチャンがいることとなります。そういう真理をここは示しているのでしょうか。

しかし結論から先に言えば、このサマリヤにおける出来事は特別な目的を持ってなされたユニークな出来事であって、今日の私たちの規範になるものではありません。サマリヤ人は確かに2段階の導きを受けましたが、同じような導きを受けた人たちとして、使徒たちのことを考えることができます。彼らはイエス様への信仰を告白して、イエス様に従って来ましたが、ペンテコステの日に聖霊の特別な注ぎを受けました。このことは彼らがそれまでは聖霊を受けていなかったということの意味してはなりません。彼らは聖霊の働きを受けて、イエス様を信じ、従って来ましたが、しかしペンテコステの日に、それまでとはスケールが異なる豊かな聖霊の注ぎを受けたのです。ペンテコステの日に注がれた聖霊の祝福とは、イエス様が十字架と復活のみわざを成し遂げ、天に昇り、父なる神の右に着座することによって初めて注ぐことのできるものだったからです。使徒たちはこの二つの期間にまたがって生きていた人たちとして、2段階の聖霊の導きを受けたのです。

サマリヤ人たちの場合、ピリポからみことばを聞き、聖霊の働きかけを受けて信仰告白へ導かれ、洗礼を受けました。しかしペテロとヨハネが到着するまでは特別な聖霊の注ぎは受けませんでした。この聖霊の注ぎには、当時、特別なしるしが伴ったようです。新しい時代が到来した当初、そのことをはっきり示すための目立つしるしがあったのでしょうか。その特別な聖霊の注ぎは、ペテロとヨハネがサマリヤに到着し、彼らに手を置くまで延期されていたのです。なぜでしょうか。それはサマリヤ人が受けた聖霊は、エルサレムのクリスチャンたちが受けた聖霊と同一のものであることを疑う余地なくはっきり示すためだったでしょう。

前回は触れたように、ユダヤ人とサマリヤ人の中には長年に渡る対立関係がありました。そんな中、ピリポから福音を聞いたサマリヤ人の上にただ聖霊が臨んだだけでは、サマリヤ人がユダヤ人と同じ聖霊の祝福を頂いたのかどうか、はっきりしません。しかしペンテコステの日に聖霊の注ぎを受けたエルサレム教会の使徒たちがやって来て手を置いた時に、エルサレムで起こったような聖霊の注ぎがサマリヤでも起こることによって、エルサレムに下った聖霊とサマリヤに下った聖霊は同一であること、サマリヤ人もユダヤ人と同じ御霊を飲む者とされたことが明らかにされるのです。ちなみにこれと同じような出来事は、今後、使徒の働き 10 章のカイザリヤにおいて、また 19 章のエペソにおいて起こります。それらはここと同じように、エルサレムで注がれたのと同じ聖霊の恵みがそれらの地にも、放射状に広がって行ったことを目に見える形ではっきり示すための神の特別な摂理による出来事でした。ですからその真理が一旦確立されたなら、あえて以後は 2 段階の導きは必要ありません。今日の私たちは、信仰告白をして洗礼を受けているなら、すでにイエス様が約束しておられた聖霊のバプテスマにあずかっているのです。

さて、この特別なしるしを伴った聖霊の注ぎを見て色めき立ったのは魔術師シモンでした。彼はこの不思議を行なう力がどうしても欲しくなり、金を持って使徒たちのところにやってきました。19 節で「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。」と言います。ところが彼はペテロから厳しく叱責されます。20 節でペテロから「あなたはあなたの金と一緒に滅びるが良い」と言われてしまいます。このやり取りを見ながら私たちの頭に浮かんで来る疑問は、シモンは本当の信者であったのだろうか、ということでしょう。二つの可能性が考えられます。一つは彼はイエス様を信じて、真の信者になったのではあるが、まだ欠けたところがたくさんあったという見方です。もう一つは 13 節の「信じて、バプテスマを受けた」という記録は外側の姿を書いただけであり、彼は本当の意味では信者ではなかったということです。皆さんはどっちを取るのでしょうか。ここの記事を見て行くと、決して彼を楽観視することはできないように思われます。

彼は 21 節でペテロから「あなたの心が神の前に正しくない」と言われました。それはまず彼が聖霊を与える権利を金で買おうとしたところに現われています。今日の人々もお金があれば何でもできると思いがちです。しかしキリスト教の救いはそのようなものではありません。キリストは私たちのために途方もない犠牲を払ってくださいました。それはお金に換算することなどできないものです。そのような尊い祝福を、神は私たちにただ恵みとして与えてくださるというのが福音です。なのにお金で得ようとするのは、彼が福音の「ふ」の字も理解していないからだと言わざるを得ません。

また彼の動機も正しくありません。彼がこれを求めた理由は、自分を高く持ちあげたいからでした。9節に、シモンは魔術を行なって人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していたとありました。彼はピリポがやって来て、第一位の座を奪われてしまいました。使徒たちから力を分けてもらって、もっと自分を高く上げたいと思ったのです。そうして人々からあがめられ、人々の上に立ちたいと思っていたのです。これも、ただ神のあわれみによる救いを本当に味わった人とは到底思えない考えです。

こうして見るとシモンには決定的な何かが欠けていたと言わざるを得ません。それは悔い改めです。これまでの記録を見てみると、彼は奇跡にばかり関心があるようです。もし本当に自分の罪を自覚し、どうしようもない自分を救ってくださる神のあわれみにすがったなら、お金でさらに特別な力を得ようなどという発想は持つはずがなかったでしょう。また自分が一番になって、人々に自分をあがめさせようという考えも持たなかったはずでしょう。そういう真の悔い改め、へりくだった心、そして神のあわれみに対する心からの感謝がないから、彼のような発言が出て来るのでしょうか。

ペテロは彼に「この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」と言います。そして22節で「あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」と言います。この勧告に対してシモンはどうしたのでしょうか。24節：「シモンは答えて言った。『あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください。』『祈りなさい』と言われたのに、「祈ってください」とシモンは言います。一見、敬虔なことばにも聞こえますが、彼は命じられたことに従っていません。また彼の関心はさばきから逃れることだけのようです。悔い改めの言葉がありません。そして使徒たちに祈ってくださいと頼んだのは、彼らの方がより力があるという魔術的な考えを持っていたからではないでしょうか。自分が悔い改める道に行くよりも、魔術的な力により頼む彼の姿がここにも示されていると見るのは行き過ぎでしょうか。

このシモンの姿から思われることは、信仰を告白し、教会の試問もパスし、洗礼を受けたから私は大丈夫だとは言えないということです。たとえ正しいプロセスを経て洗礼を受けても、シモンのような人も教会には混じり得るということです。それはイエス様も前から言っておられたことです。種まきのたとえでも、みことばを聞いてすぐに喜んで受け入れるが、しばらくの間そうするだけで、何かあるとすぐつまずいてしまう人のことをイエス様は語られました。また山上の説教でも「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではない」と言われました。一時的な情熱を示しても、それだけでは何の保証にもならない。ですから私たちも自分を吟味しなくてはなりません。私はこのシモンのものであることはないだろうか。私の心は神の前に正しいと言える状態にあるのかどうか、と。

最後25節にサマリヤ伝道が次のように結ばれています。「このようにして、使徒たちはおごそかにあかしをし、また主のことばを語って後、エルサレムへの帰途につき、サマリヤ人の多くの村でも福音を宣べ伝えた。」ピリポによって始められたサマリヤ伝道でしたが、使徒たち自身、その地でみことばを語り、またエルサレムに帰る途中でもサマリヤの多くの村で福音を宣べ伝えました。今やサマリヤ伝道は主の大いなる導きの下にあるということが使徒たちによって公に受け止められたということです。その御心のために、このように従う使徒たちの姿がここにあります。

そしてこの使徒たちの姿は、先のシモンと対照的な姿としても見えて来るのではないのでしょうか。使徒たちはピリポの成功を妬んだり、それに何かケチをつけたり、業績争いなどをしていません。彼らはひたすら主をあかしし、主のことばを語り伝えることに専心しています。聖霊はイエス様の栄光を現わし、イエス様を証しする霊ですから、聖霊に導かれている人はまさにそうすることに自分を現わし、またそのために他の人と一致して取り組むことのできる人なのです。

福音はこうしてエルサレムからサマリヤへと拡がりました。そしてこのあと見て行くように、地の果てまで広げられて行きます。まさにその結果として、私たちの日本にもこの祝福はもたらされました。しかしサマリヤまで祝福が拡げられる中で、シモンのような人がいたように、私たちも福音が届けられた祝福の中にありながら、彼のような状態にいるということはないのでしょうか。私たちも色々な動機で主のもとに来たかも知れません。しかし今、神の前における私の心はどうでしょうか。「神の前に正しい心」とは、自らの罪を認め、悲しみ、神のあわれみを待ち望む心です。詩篇 51 篇 17 節：「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」34 篇 18 節：「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる。」神はそのような私たちに、御子キリストの十字架による救いをくださいました。これはお金には換算できない救いです。高価で無限の価値を持つ救いを神は一方的な恵みとして、聖霊を通して私たちに与えてくださいます。この恵みにあずかった人は、自分の栄光のために生きようとはせず、自らのすべてをささげて主の栄光のために生きようします。そして聖霊を頂いている者として主のあかしをする者となります。そのような生き方に、お金では買えない尊い救いを頂いた私たちであることを証しする、そのような歩みへ進む者でありたいと思います。